琉球大学学術リポジトリ

「視聴覚教育」におけるスライドづくりの実践

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-07-19
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1087

「視聴覚教育」におけるスライドづくりの実践

藤 原 幸 男

A Practice of Making of a Slide Work in "Audio－Visual Education"

Yukio FUJIWARA＊

(Received October 31,1991)

はじめに

私は1978年以降から琉球大学において「視聴覚教育」を担当してきている。「視聴覚教育」については、はじめは試行錯誤で講義を組み立てていった。そのうちに「視聴覚教育」では理論だけでなく、実際に制作させることが大切だと気づいた。そこで1980年度からは、「8ミリ」映画の制作をグループでさせていった。そのうちに、制作過程の単純さの利点を考えて、たしか1983年度からスライドづくりに代えていった。「視聴覚教育」にスライドづくりの制作活動を導入して、1990年度で8年になる。この間、「中等教育原理Ⅱ」との合併の形で、50名規模のクラスでおこなってきた。1991年度からは新免許法にともなう教職科目の改訂によって、「視聴覚教育」は教職選択科目となり、クラス規模は20～30名になる。ここで一つの区切りをつけ、1990年度の実践をもとに、「視聴覚教育」におけるスライドづくりの実践を記録に残しておくことにしたい。

1 「視聴覚教育」におけるスライドづくりの実践

(1) スライドづくりに入るまで

1990年度の「視聴覚教育」講義（後期・2単位）では、前半は「視聴覚教育の歴史と理論」後半は「テーマを決めてのスライド班制作」をおこなった。これまでの経験から、後半のスライド班制作にはかなり時間がかかり、時間不足になる傾向にある。そのために前半の「視聴覚教育の歴史と理論」にはあまり時間をかけず、簡潔に次のような形でおこなった（テキストは秋山隆志郎・岩崎三郎編『改訂・視聴覚教育』樹村房、1990年、を使った）。

10／11　視聴覚教育の歴史的背景

視聴覚的教育方法による教育活動の源流として、一方で、コメニウスにはじまる直観教授の展開があり、他方で19世紀中頃から発達してくる近代的コミュニケーション技術があり、その両者に支えられて現代の視聴覚教育は成立していることを述べた。

10／18　戦後初期視聴覚教育理論
　　—波多野完治を中心に—

波多野完治は、戦後新教育思潮が流入してくるなかで、アメリカのE．デールの視聴覚教育理論にもとづきながら、ピアジェなどの心理学的観点を取り入れて独自に視聴覚教育の理論化をはかった。この戦後初期における波多野完治の視聴覚教育理論を講義し、「理性的把握をあたえるために、言語をともなう、ゆたかな感性的体験をあたえるもの」という波多野の視聴覚的教育方法の定義の意義について述べた。

10／25　視聴覚教育と教育工学
　　—視聴覚教育の方法原理—

1960年代にはいりプログラム学習などの教育工学的考え方が盛んになり、視聴覚教育の理論と実践は衰退していく。そのなかで1970年代にはいって視聴覚教育の見直しがおこなわれていく。視聴覚教育の意義は、映像教材などをとおして具体的・

＊Department of Education, College of Education, University of the Ryukyus.

感性的体験をあたえ、子どもの個性的なとらえ方をひきだし、それらを交流させて教授＝学習活動を組織し、当初の教授目標を補正させたり、拡充したりしていくことにあることを理論レベルでおさえ、その考え方で視聴覚教材の総合的利用を試みた「しょうぼうしょのおじさん」の事例を紹介しその意義を述べた。

11／1　視聴覚教材と認識過程
—仮説実験授業の問題提起—

仮説実験授業は科学教育の授業理論で、問題→予想→討論→実験の形をとって授業を進行し、その繰り返しによって科学的概念・法則を教えていくものである。この仮説実験授業は岩波映画製作所と提携してその考え方にもとづいた科学映画をつくっている。本時間では、岩波映画製作所のつくった科学映画「ものとその重さ」を映写し、そのあとで仮説実験授業の理論について説明し、再度科学映画「溶解」を映写し、感想を書かせて、認識過程の法則性にのっとった視聴覚教材の意義について理解を求めた。

11／8　視聴覚的教授メディア
—各種視聴覚的教授メディアの講義とＯＨＰ班制作—

黒板、模型（モデル）、写真・スライド、８ミリ・ビデオについてその教授学的機能とメディア的機能を説明した。そのさい、教科教育実践での事例を紹介し、その奥行きの深さを感じさせるように努めた。その後、ＯＨＰを使って、４コマ漫画風に一つのストーリーを作って、ＯＨＰを使っての演示に班で取り組ませた。このＯＨＰ班発表には、スライドづくりにつなげることを意図していた。ここで班での知恵の出し合いとコマの構成に慣れさせるというねらいもあった。時間が足りず、班での作成は次の時間までに各班でやってくることにし、次の時間に班毎の発表をおこなうことにした。

(2)スライドづくりの取り組み

11／22　過去作成されたスライドの映写

大学祭をあいだに挟んで、11／22よりスライドづくりに入った。11／22は前の時間に積み残していたＯＨＰ班発表をおこなって、そのあとスライドづくりのための班編成をした。受講生49名で、９〜10名の班をつくった。そのさい、同じ学科の学生を３名程度一緒にして、学部学科の混成した班を編成した。班で自己紹介をさせたあと、過去「視聴覚教育」で制作された比較的すぐれたスライドを映写した。「泡盛」「壺屋焼」「芭蕉布」の三つのスライドを映写した。とくに「芭蕉布」は、作業現場での作業音を吹き込み、またインタビューを取り入れていて、まるで現場にいあわせているかのように臨場感にあふれ、動的に作られていた。少しせりふが長いのが欠点だが、けっこううまく作られていた。映写のあと、スライドをみて、すぐれている点・工夫した方がよい点を班で出しあわせた。多くの受講生はこんなすばらしいスライドができるのかと感心していた。スライドづくりへの期待と不安をいだかせたようだった。

11／29　テーマの模索

当初の計画ではビデオ「いい旅日本（沖縄編）」を見せる予定であったが、まだまだイメージづくりが足りないと感じたこともあって、先週に引き続き過去制作されたすぐれたスライドの映写をおこなった。こんどは、地域にねざした食べ物屋をとりあげ、首里の「さくら屋」を取材した「沖縄そば」、同じく首里にある「山城饅頭」をテーマとしたスライドを映写した。とくに「山城饅頭」は饅頭の作り手の暖かさを感じられる作品で、こんな作品ができたらいいなという印象を見たものに感じさせた。前回と同じく、スライドをみて、すぐれている点・工夫した方がよい点を班で出しあわせた。このあと、スライドの制作過程（企画→撮影→編集）を説明し、次のようにスライドづくりの条件設定をした。

ね　ら　い

① 視聴覚的表現を使って、一つのテーマで授業に使える教材を作る。
② 地域に出ていき、取材（インタビュー・調査）活動をして、地域に根ざした教材を作る。
③ 視聴覚機器の使用法に慣れる。

条件設定

沖縄の身近な地域産業・文化・伝統芸能などをテーマにして、スライドづくりをする。

コマ数　25コマ程度　時間　10分程度

＊フィルム（36枚取り1本）、テーマ（インタビュー用と録音用各一本）は大学で用意する。

そのあと、各班でテーマとなりそうなものをいくつか列挙させた。沖縄の身近かな地域産業・文化・伝統芸能について日頃注意して考えていないせいか、あまり浮かばず、テーマとなりそうなものを挙げるのに時間がかかったが、各班ともいくつかあげることができた。できそうなものを2～3に絞らせ、授業時間の終わりに全体で発表させた。この時点では1班では「米軍基地、ハブ、島ドウフ」、2班では「戦跡、シーサー、紅型」、3班では「三線（さんしん）」、4班では「ちんすこう、豚料理、琉球料理」、5班では「琉球ガラス、紅型、オリオンビール」があがっていた。各班で資料をさがし、次の時間にもちよることにして終わった。

12／6　テーマの決定

この時間は、各班でもちよった資料をもとに、テーマを絞るための話し合いをした。私は各班の話し合いをそばで聞いて、「このテーマはむつかしいのではないか」「これはおもしろそうだ」といってまわった。価値があってしかもおもしろくできそうなものへと方向づけをしていった。

そのあとで、「いい旅日本（沖縄編）」を映写した。このビデオ番組は、本土のテレビスタッフによって制作された旅番組<1988.1.7 放映>で、オムニバス風に沖縄の見どころをとりあげたものだが、着眼点がおもしろい。コーラの廃瓶で琉球ガラスをつくっていること、沖縄の家の屋根にみられるシーサーのうち漆喰のものは瓦職人がつくっていること、沖縄の酒・泡盛で使う米はタイ米<原料100%>であること、140年前につくられた古酒が今でも残っていて飲めること、沖縄離島周辺の海で2mを越す巨大イカ<くぶしみ>が取れ、正月料理に使われていること、など「えっ」と思うような観点で取材をしていて、スライドづくりに参考になる。また、同番組では関係者に直接インタビューをしていて、関係者の生の声をとおして沖縄を知ることができる。この点もスライドづくりに生かすことができる。ということで「いい旅日本（沖縄編）」をみせ、終了後に気付いたことを班で出しあわせた。それをもとにして、スライドづくりの留意点として、次の2点を板書した。

① 意外な事実・資料を発掘し、効果的に取り入れる。

② インタビューをし、効果的に取り入れる。

その後また班で話し合いをさせ、最終的にテーマを決定させた。各班のテーマは、1班「海人（うみんちゅ）」、2班「シーサー」、3班「三線（さんしん）」、4班「豚料理」、5班「紅型」に決まった。

12／13•20　コンテ（撮影台本）の作成 (1) (2)

テーマが決まると、次には中身とその組み立てを考えなければならない。そのためには、オーソドックスには、スライドの流れ（構成）、撮影指示、解説文を書いたコンテ（撮影台本）を作成することが必要になる。コンテづくりについて書かれたプリント（櫛田磐・土橋美歩・小佐々晋・中沢茂夫『視聴覚教材を創る』学芸図書、1980年より抜粋）を用意し、それを読み合わせし、コンテづくりにおける注意事項を指摘しておいた。それをもとにして、このテーマで取り上げる内容・事項を列挙させ、それらを一連の流れに構成させた。あわせて、こんなコマがほしいと思われる場面を絵や文で書かせ、さらに解説文をつけさせた。もちろんコンテが書けるためには、かなり資料を読み、実地調査をしなければならず、各班は講義時間外での取り組みで結構忙しかったようである。けじめをつける意味で、コンテは12月25日までに藤原（教育202）に提出することにした。

これから冬休みにはいるために、各班にフィルムとテープを配布し、班の撮影計画をたてるように指示し、次のような「撮影計画」用紙を配った。（実際には、いくつかの班はこのときまでに何度か下見に行っている。）

撮影計画　　○班

1　撮影計画（何時、何を、どこで）

○月○日　○○の下見

○月○日　○○の撮影

○月○日　○○の下見

○月○日　○○の撮影

2　班内の役割分担

各班の撮影したフィルムは1／17までに提出することにした。各班はほぼ期限どおりに提出した。さっそく現像に出した。あとは現像待ちである。

1／24・27　編集 (1) (2)

かえってきたスライド・コマを各班に渡した。それぞれの班は自分たちの撮影したものがきれいに撮れているか期待と不安にみちてプロジェクターにかけて試写していたが、けっこうきれいに撮れていたようで、これならうまくできると思ったようだ。そのあとコマをコンテにそって並べて、不足なコマは取り足すことにして、チェックしていった。それから以前に書いた解説文を手直ししていった。わかりやすい解説文に書き直すのに、意外に時間がかかったようである。解説文の吹き込み、BGM・インタビュー・効果音の吹き込みは、「視聴覚教育」の講義時間内ではできず、各班とも、教育学部付属教育実践研究指導センターを使ったり、クラブ活動の部屋を使ったり、あるいは班員の下宿を使って静寂な時間帯に録音したようである。吹き込みは大変で、夜更けまでかかり、ある班は発表会の直前にできあがって、大変な思いをしたとレポートに書いていた。

2／7　スライドの発表会

いよいよ発表会である。各班とも緊張している。1班から順に発表していった。1班「海人」は直前に完成したためか録音の音の高低がめだって、聞きとりにくく、この点が残念だったが、インタビューはきれいにとれていて、内容的には良かった。2班「シーサー」はコマをさかさまに入れていて、映写後すぐにやり直しになり、見る意欲をそいだが、ゆったりとしたナレーションで、内容的にも無理がなく、まずまずのできだった。3班「三線」はナレーションが速く、また録音の音が小さく、録音に難点があったが、内容的にはまとまっていた。4班「豚追跡物語」は豚飼育場にはじまり、公設市場での豚肉の解体・販売、豚料理、豚肉の栄養学的検討へと進み、班員自身が楽しみながら追究していて、視点の面白さがあった。ただ、やはり録音の不備があって、インタビューの声と雑音が混ざっていて、惜しいと思った。5班「紅型」は「紅型」の工程はわかりやすくできていたが、インタビューがとりいれられていない。また、音響効果がなく、平板に聞こえたのは、残念だった。以上は私の感想だが、ただ映写するだけではおもしろくないので、各班に「スライド評価用紙」を渡し、5段階で評価させ、また気付いたこと（良かった点・工夫するとよい点）を記述させた。一通りスライド発表を終えて、今後は各個人に「個人の感想」（B6サイズ用紙）を書いてもらった。その後、次のような「視聴覚教育レポート要領」を配り、2月21日までに提出するように話した。なお、スライドづくりにとりかかるさいに、制作記録をレポートしてもらうので、記録をとっておくようにと、受講生に話してあった。

1　表　題　スライド制作に取り組んで－「○○（テーマを書く）」（○班）－

2　書き方

制作過程にそってルポルタージュ（記録文）風に書く

①　企　画

② 撮影台本の作成
③ 撮　影
④ 編集（録音を含む）
⑤ 発表会
⑥ スライド制作を終えて－後輩へのアドバイス－

3　枚　　数
レポート用紙８枚以上

4　締切期限
２月21日（木）５時まで

＊「レポート」を中心にして「評価」をしますので、上記要領にしたがって、締切期日までに提出してください。

２／14　スライドづくりを終えて

各班に書いてもらったスライド評価によれば、５段階表の得点は、２班「シーサー」と４班「豚追跡物語」が18点、１班「海人」と５班「紅型」が15.5点、３班「三線」が14点であった。得点を紹介し、班ごとの気付きを読み上げた。短時間での記入にもかかわらず、各班ともよく観察していて、うなずける点が多かった。「班による評価」のあと「個人の感想」を要約的に読み上げ、それをもとに、評価のくいちがったところを中心に若干の検討をした。また、各班の苦労した点・工夫した点について班ごとに発表させて、見えない苦労・工夫を表面に出させた。（資料１）

以下では、得点の高かった４班「豚追跡物語」を中心にしてスライド作品を紹介し、スライドづくりをとおして学生は何を学んだか、をみていきたい。

2　スライド作品の紹介―４班「豚追跡物語」

すでに触れたように、４班「豚追跡物語」は、沖縄の「獣肉文化」のなかに沖縄の豚を位置づけ、養豚場の見学にはじまり、そこで育った豚肉の解体・販売に携わっている牧志公設市場を見学し、二階の食堂で珍しい豚料理を食べ、自分たちも豚料理を作ってみる、その上で豚肉の栄養学的検討にすすみ、豚料理と長寿の深い関係に触れて、沖縄の豚肉文化のまとめをしている。沖縄の豚肉文化を客観的に紹介するのではなく、豚肉の生成過程をたどり、豚肉文化に驚きながら、それに触発されて自分たちで豚料理を体験し、豚肉文化を実感し、そのうえで豚肉の長寿効用に触れている。問題追究的で、楽しみながら、スライドづくりに取り組んでいる。そのせいか、まとまりが足りないようにもみえるが、視聴者も一緒になって制作過程を追体験しているような感じを与えていて、おもしろくできあがっている。以下で、４班のつくったコマの内容とナレーションを紹介したい（①②などはコマの番号である）。

コマの内容	ナレーション
沖縄の食文化は「獣肉文化」	① 「豚料理で食べられないのは豚の鳴き声だけ」という言葉に興味をもち、また本土から来た学生の「耳や内臓まで食べるの？」という一言が、私たちに沖縄と豚料理

への関心をもたせました。かくして、私たちの「豚追跡物語」への旅が始まりました。

沖縄の食文化は本土の「魚肉文化」に対して「獣肉文化」であると言われています。特に豚は、14、5世紀に中国から持ち込まれて以来、600年の歴史をもち、飼育頭数はこの30数年間に3倍にも増加したと言われており、現在30万頭余りもの豚が飼われています。

② それではこのような豚を中心とする「食肉風土」が育ってきたのはなぜでしょうか。

第一に、仏教における肉食禁忌の影響がなかったこと。

第二に、気候風土が豚や山羊・牛などの飼育にうまく合っていたこと。

第三に、沖縄の地理的位置からの交易時代における中国・朝鮮・東南アジアなどの国々からの影響。

第四に、27年間に及ぶ米軍統治における影響。

第五に、ポーク缶詰を利用した食の形態。

以上6つのことが、沖縄独自の豚を中心とする「食肉文化」を形成させた大きな要因といえます。

そこで私たちは、沖縄の人々と深い関わりのある豚を追ってみました。

養豚場

③ ここは西原町にある南国養豚生産組合です。この養豚場で、たくさんの豚が飼育されています。

④ 昔の豚小屋はフールと呼ばれ、古く中国から伝わり大正時代まで使用されていました。この中で豚を飼い、人の糞便を与えていました。しかし人糞は不衛生なため、戦後すぐに廃止されました。

⑤ 現在の豚小屋は子豚と親豚とに分けて育てられます。この養豚場では約200頭の子豚が飼われており、およそ100日で親豚として別な小屋に移されます。親豚になると1頭ずつ育てられ、静かに肥るのを待ちます。

⑥ 豚の飼育をしているおじさんに聞いてみました。

＜インタビュー＞

また、肥らすための秘訣は、蛋白質を多く含んだ餌を与えることだそうです。

⑦ 次に豚の餌についてみてみましょう。豚のえさとして、このタンクの中に入っている総合飼料が使われています。

⑧ 栄養価の高い総合飼料を与えることによって、病気にならないように気をつけています。

昔の飼料は田芋や植物の葉、魚介類、芋などで、きわめつけは、はるばる台湾から導入されたアフリカマイマイを与えていました。

⑨ 配合飼料のほかに、おからが使われています。

⑩ また、レストランからの残飯を調理して与えています。

配合飼料はお金がかかるので、主にこの残飯を与えていますが、本当は配合飼料の方が望ましいそうです。

⑪ このように肥った親豚は、次のような場所に移されます。

牧志公設市場

⑫ ここは那覇市にある「牧志公設市場」です。ここは市民の台所であり、魚、肉などを豊富に取り揃えてあります。私たちの追っている豚肉もたくさん置いてあるのではないかということで行ってみました。

⑬ 入口から入ってしばらく足を進めると、私たちの追い求めていた豚肉が目を見張るような大量の山となって売ってあります。ここに写っている肉、すべて「豚肉」です。

⑭ 豚肉の山の中には、見たこともないようなものもたくさんありました。ここに写っているのはそのほんの一部で、右上が肺、右下が三枚肉、左は顔です。これらの値段は…顔は一枚250円、沖縄の人がよく買っていくてびち、いわゆる足は100円、というように「結構、安いのねー！」という感じを受けました。

⑮ 豚の食べられない部分はほとんどありません。その証拠に、写真はただ豚の頭をとって半分にしただけのもの。これを各部分に分けて、すべて売ってあるのです。

⑯ 肉をさばいているお兄さんによると、1日2頭の豚をさばくそうです。

⑰ 豚肉を売っているおばさんは、お客さんの注文に応じて、次から次へと料理しやすいように肉を切り分けていました。

⑱ その公設市場の二階にある食堂には、いろいろな料理がありました。

⑲ 足てびちは1年に県民一人あたり2本の足を食べている計算となり、1年間に100万本の足が県民の胃袋に軽く納まっていることになります。てびちには多量のコラーゲンが含まれており、脳や血管、骨を強くする働きがあります。

沖縄では内臓を食べるという食生活がありますが、他にどのような料理があるか見てみましょう。

⑳ さて、これはどこの部分だと思いますか？これは子袋といって、豚の子宮を炒めた料理です。淡泊で歯切れがよく、イカのような味がしました。

㉑ 次に腎臓ですが、レバーのような味がしました。この他、「中味」という腸を使ったものや、耳・尻尾を使った料理もあります。

豚料理を作る

㉒ それでは、沖縄の代表的な豚料理の「てびち」と「ミミガー刺身」を実際に作ってみましょう。まず、てびちの材料です。豚の足を5本、大根、昆布、鰹節、醤油、

塩少々です。

㉓　一度あく抜きをした豚の足を鰹節のだし汁に入れ、塩を少々加えて、3時間ほど煮ます。箸が肉に立つようになると、あらかじめ水にもどし結んだ昆布と角切にした大根を入れます。

㉔　大根や昆布がやわらかくなる頃に、味付けとして醤油を加えます。

㉕　これで出来上がりです。

㉖　次に、豚の耳を使って「ミミガー刺身」に挑戦してみましょう。材料は、あらかじめ細長く切られた豚の耳、キュウリ、ピーナッツ・バター、そして砂糖少々です。

㉗　まず耳皮をさっとゆで上げ、あく抜きをし、それにせん切りにしたキュウリ、ピーナッツ・バター、砂糖、水を加えてよく混ぜます。好みによってお酢を少々加えてもよいでしょう。

㉘　これで出来上がりです。コリコリとした歯ざわりがクラゲに似て、酒の肴に最適です。

豚肉の栄養学

㉙　今までさまざまな料理をみてきましたが、豚肉について保健学科の松崎俊久教授に話をうかがってみました。

＜インタビュー＞

㉚　詳しくグラフを使って見ましょう。コレステロールについては、豚肉は一般的に高いと言われていますが、実は鶏肉の半分で、牛肉とは同じくらいです。

㉛　平成元年度、家計調査年報による一世帯あたりの豚肉の年間購入量は、グラフでわかるように、沖縄が24.5kgと多く取っていることがわかります。

㉜　このように豚肉を多く取っている沖縄県は、男女とも日本一の長寿県です。

文化・歴史・社会との関わり

㉝　このお婆さんたちを見てください。とても元気でしょう。おそらく昔から多くの豚肉を食べ続けてきたことだと思います。日頃、私たちが食べている豚料理は文化・歴史・社会にも深い関わりがあります。これからも、私たちに親しみのある料理として取り入れられていくことでしょう。

3　スライドづくりをとおして学生は何を学んだか－学生の提出したレポートの分析をもとに－

多くの学生がまじめにレポートに取り組み、全体的によく書けていた。学生たちは思わぬアクシデントに遭遇し、さまざまな失敗を体験しながら班で一致協力して取り組み、スライドづくりの大変さと意味深さをからだで学んでいった。このことがレポートを読むと、よく伝わってくる。（資料2）

たとえば、4班「豚追跡物語」では、朝5時半に起床して取材にでかけたものの、取材先が決まっていなくて、電話をかけまくり、やっと取材先の養豚場が見つかったとか、教育実践研究指導センターをかりて録音したが、再生してみても音が入っていなくて、何度やってもうまくいかずあせったこと（配線のつなぎまちがい）や、テープを聞き

返す余裕が時間的になくて、発表会で映写してみてはじめて雑音が重なっていることに気付いたことなど、得難い体験をたっぷりしたようだった。

さらい、教材づくりの過程を体験したといえる。レポートのなかからさぐれば、一つにはテーマの設定について、意外生の重要さに気付いている。4班のAレポートでは、「見方のちがい（沖縄ではあたりまえだと思っていても、本土の人にしてみれば、おもしろいとおもったりすることなどが結構あると思う。）などからテーマをだすとおもしろいものができるようである。」と述べている。Bレポートでは、「本土の人が半数を占めていて、彼らは沖縄の人が豚の内臓や足を食べるのが不思議でたまらないと、ウチナーンチュ（沖縄人）である私に『なぜ？』と質問してきた。『なぜ』と尋ねられても、物心ついたときから食べていたのだから理由などない。答えに困った私は、『よし！それじゃあ、その謎を解きあかすために、テーマは〝豚〟だぁ！』と、かくして我々の豚追跡物語が始まる。」と述べている。二つには、コマ取りにあたっては、自分が驚いたところを取ることの大切さに気付いている。Aレポートを書いたのは本土出身の学生だが、「豚がまっ2つに切ったままのやつとかがデーンと置いてあり、インパクトが強く、これをぜひスライドの一枚へということで写真をとった。じっくりみればみるほどびっくりの連続で、見たことのない顔の皮（これ本当に豚ってわかるので気持ち悪かった）や耳、しっぽなど内臓関係ももちろんのこと、豚のすべてが売られていた。」と述べている。

そうした苦労や驚きを各班とも体験してスライドづくりに取り組んだせいか、他班の発表の裏にある見えない苦労を理解でき、また、ちょっとしたミスにも共感的に見ることができ、発表会の個人感想では、「どの班もひとつのテーマについて、いろいろな工夫をこらしており、……一つのテーマについて、いろいろな角度から眺めていて、変化に富んだ内容のあるものだった。」とか、「三線、シーサーなど、なまえ・物などを知ってはいたが、それができあがるまでには人々のさまざまな苦労があるということを改めて気付くことができました。」とか、「わずか10分程度に編集されている作品にも、その裏には大変な苦労があることを知った。」という感想が多くあった。また、班の仲間とともに一致協力して作品をつくり出すことの大変さと喜びも知ったようだった。（資料1を参照）

だが、夢中になりすぎていて、自分たちの取り組んだスライドづくりを対象化することが弱く、「視聴覚教育」講義の本来のねらいでもある「授業に使える教材をつくる」という視点が全体的に意識されていないように思える。「後輩へのアドバイス」という節で触れさせたつもりであったが、部分的に不充分であったように思われる。この実践を教育実践研究会（1991.6.8）[11] で報告したところ、大学生にこうした体験をさせることは大切だが、高校生のスライドづくりとあまり変わらないようだという批判を受けた。なぜ失敗したのかを意識させ、また「視聴覚教育」における視聴覚的教材の制作との関係を意識させるようなレポートの書き方が必要であったようにも思われる。

4　反省点

50名規模の「視聴覚教育」での取り組みとしては班のまとまりもよく、近年のスライドづくりの実践としては割りとうまくいったように思われる。テーマ設定の段階からていねいに時間をかけて雰囲気をもりあげていったこと、各班とも一生懸命に取り組んでくれたことがうまくいった原因だと思う。

だだ、反省点としては、教育実践研究会でも指摘をうけたのだが、各班に与えたフィルム一本では少なすぎて、コマの絵表現を長い説明でおぎなうことになってしまっている。また、説明とコマとのあいだにズレが生じてきている。[12] もっとフィルムをたくさん与えて、撮影枚数を多くしてたくさんのコマのなかからスライドのコマを選定し、スライド写真で説明していく必要があったように反省する。この点、次の実践では改善したい。

また、スライドは静画なので、録音のでき・ふできがかなり印象に残る。各班とも、このことは痛感したはずである。技術指導の困難さはあるが、録音技術の指導を今後検討したい。

注

(1)　琉球大学教育学部の教育学担当教官・教科教育担当教官15名を会員として、1991年4月より月1回、教育実践について報告し、検討している。いままでの報告は次のとおりである。

4月13日　齋藤浩志「授業とは何か」
5月11日　田港朝昭「大学の授業改善―『社会科教材研究』の実践―」
6月8日　藤原幸男「『視聴覚教育』におけるスライドづくりの実践」
7月6日　里井洋一「不発弾教材の有効性―爆弾被害の意味すること―」
9月10日　小田切忠人「就学段階における児童の数概念の形成について」

(2)　コマで語らせることは、スライドづくりの基本であって、経費の面ばかり考えてこのことが結果的におろそかになっていた。

「コメントについて特に注意するべきことは、写真に撮れていないものや、画面で扱っていないことをながながと説明・解説してはならない。スライドはあくまでも画面の映像で物を言うのであって、絵が焦点ボケしているのを説明で補うのは、弁解であって、本質的にスライド教材になっていない。／スライドにつけられることばや文字は、あくまで映像による感覚的経験から思考を促進させる補助・指示的役割と心得るべきである。初心者のおかしやすい失敗は『よくみえない写真と長いナレーション』であり、良い作品は『みせたい内容がよく写し出されていて、ことばが短くてすむ写真』なのである。」（櫛田磐・土橋美歩『視聴覚教材を創る―スライド・OHP・録音・録画―』学芸図書、1980年、58ページ。）

資料1

「スライド」評価・感想

91.2.14「視聴覚教育」

1　班による評価　　自分の班は除く

班	得点	気付いたこと
1班（海人）	15.5	題字が貝殻で書いてあるのが良かった。 写真の取り扱いが大変良かった。きれいに撮れていた。 音楽が効果的に使われ、場面に合っていた。 効果音の使い方（ガーン）が良かった。 図が多く使われている。 わかりやすい内容だった。
		バックのインタビュー（おじさんの声）がはっきりしていなかった。 ときどき音が小さくなっていた。音のばらつきがあった。 表が見にくかった。表を書くときは太い字で書いた方がよかった。 インタビューの質問が途中で切れていた。 間が多すぎた。一つのスライドを説明する間が長かった。 漁のとき、音響があった方がよかった。
2班（シーサー）	15.5	導入の仕方が工夫されていて、良かった。 製作過程がわかりやすかった。 全体的に流れが良かった。進むテンポが良かった。

班	得点	気付いたこと
		島袋さんの人柄がよく表れていた。 アナウンスが語りかけてくるようで、自然なあたたかみがあった。 ナレーションの声の大きさ・スピードもちょうど良かった。 ＢＧＭが良かった。
		もう少しナレーションを入れても良かったのでは。 雑音があって、うるさかった。 コマ送りをもう少しゆっくりした方が良かった。
3班 （三線）	14	タイトルがきれいだった。 地図・表がみやすかった。 場面転換の合図に三味線の音を使っていたのは、内容と合っていて良かった。
		ナレーションのテンポが少し早く、冒頭がきれている所もあった。 コマを変えるときの三線の音がよかったが、ナレーションの読み始めが早くて、コマ替えと重なっていたのがもったいなかった。 内容はわかりやすかったが、少し、スライドをすすめるのが速かった気がする。 製作過程がわかりにくかった。 又吉さんの話が聞きにくかった。 音が小さかった。もっと大きく聞こえたら良かったと思う。 音響効果が少し足りなかった。
4班 （豚追跡物語）	18	内容的に面白かった。わかりやすかった。 豚をいろいろな視点からみていたのは良かった。視点が面白い、沖縄の長寿の飼育から料理の用途まで、様々な角度から取材していて良かった。 実際に料理していたところなど良かった。 ナレーションの声の大きさが良かった。
		インタビューが聞き取りにくかった。 インタビューのときのバックが人の声でうるさかった。 先生のインタビューが聞こえなかった。 おじさんの話が聞きにくかった。 １コマのナレーションが長かった。
5班 （紅型）	15.5	ナレーションがテンポ良かった。 内容が濃くて良かった。 紅型ができあがるまでの工程がよくわかった。 紅型の色が鮮やかにでるように写真が撮られていた。きれいだった。
		インタビューの場面はあったのに、テープに入っていなかった。インタビューの生の声があればもっと良かった。 ナレーションだけでだったので変化がなく、淡々としていた。 もう少し音響効果を取り入れた方がよいと思う。 もう少しナレーションの声が大きい方がよいと思う。 ナレーションが速かった。

2　個人の感想

1班

自分たち1班は「海人」をしたのだけど、スライドとスライドのあいだがあきすぎていたり、ナレーションもスローテンポだったし、スライドの運びもスムーズではなくて、反省する点ばかり頭に浮かんできます。でも、みんなで海人の上原さんの所へ取材に行ったり、普通の授業では経験できないことができて、すごく楽しかったです。自分たちを含め、この授業をとっているみんな、スライド作りご苦労様でした。(芳崎)

私たちの班は録音するのに取り組むのが遅くて、せっぱつまって一体どうなることかと思った。しかし、実際に自分たちのものと他の班との比べることで多くの反省点がでた。私たちの予想に反してスライドとスライドのあいだがあきすぎていて、見ている人たちを待たせてしまったのが大きな反省点だと思う。他の班は（特に2班）テンポがよくて見ていてあきがこなかった。今度、また、スライドを作る機会があったら、今日の反省点を注意して取り組もう。「中原」でこの授業をとって、ためになった。(渡慶次)

スライドづくりはたいへんだった。私たちの班の反省としては、各コマの間がながかったようだった。もう少しテンポよくいけば良かったと思う。他の班の作品を見て、どの班もすばらしかったと思う。見やすかったし、おもしろい作品もありました。もうすこし時間があればよかったなぁと思います。スライドを教材として使ったら子どもも勉強になると思いました。どの班もインタビューがちょっと聞き取りにくかったので、今度から考えていったらいいと思います。みんなで協力して一つの作品をつくり上げるのはたいへんだけど、いい経験をしました。(上村)

私たちの班は少し要領が悪かったせいか、発表会当日の朝仕上がったけど、なかなかうまくいったのではないかと思う。多少（？）反省すべき点がいくつかあったが……。／他の班に関しては、各班ともそれぞれ工夫がされていて、感心するような作品ばかりだった。2班の導入の仕方や、3班の三線での合図などは特に〝おもしろい〟と思った。／作業に追われての制作ではあったが、いろいろ勉強ができて良い経験だったと思う。(玉木)

ビデオと異なりスライドは動きがないので、ナレーションのテンポは重要な位置を占めてくると感じた。スライド間の間の取り方もそうである。自分たちの大きな反省点である。個人的には、2班のシーサーが良かったと思う。間の取り方、導入方法など工夫の後が見られた。少し、ナレーションの内容が少ないとは感じたけれども。／どの班も苦労した結果がでていて、視聴覚教材作りの楽しさ・難しさを実感したと思う。(渡久川)

実践という形で、今回このような体験をさせていただいたことに深く感謝します。結果はどうあれ、みんなで共に苦労し、作品を完成できたことは、今後の励みになると思います。他の班の作品は素晴らしいできばえで、自分たちの班の失敗点を比べるにつけ、反省するばかりです。沖縄の文化に接し、広めるためのスライドづくりをする、と初回の授業で耳にし、先輩方の作品を見せていただき、それでは私たちは何にとりくむかとしたとき、無理矢理先輩たちと異なった題名にしようとしました。ところが、視点を変えることにより、また違ったものもできうるということが知らされました。(七呂)

シーサーは色々な形のものや作り方など同じような画面が多かった。豚追跡物語は養豚業の様子や料理など、いろいろな面から取材されていて良かったと思う。／紅型はインタビューやＢＧＭをもう少しいれたらもっとよかったと思う。(玉城)

シーサーは、作り方だけで終わった感じ。インタビューの方法が良かった。三線は、作り方がよくわかって、おもしろかった。紅型は、おじさんのインタビューが聞きたかった。(知名)

2班

全体的にみると、殆どの班が「何かの制作過程」のスライドであり、少し単調で、時間が経つにつれ

おもしろ味がなくなっていった、というのが実感である。細部についてふれてみると、インタビューの時に相手の声が小さかったり、あるいは、周りの声がうるさくて聞こえにくかったりしたものがあった。／全てのスライドが沖縄の文化についてのものであり、日頃そのようなものを身近に感じない私にとっては、非常に有意義なものであったように思われる。(照屋)

他班に比べて僕らの班が良かった点は、ナレーションの録音状態（ＢＧＭ、制作者のインタビュー）です。しかし、シーサーを作る過程の内容が不足したような気がした。1班は写真の撮り方、インタビューがとてもよかったが、少し長すぎのような気がした。3班はコマを変えるのに三線を使っていたのが良かった。4班は視点、内容とも良かったが、インタビューが聞こえず、もう少し現場の音を入れてもよかったのでは。6班は紅型を作る過程がよく理解できたが、流れが単調だったような気がする。(西原)

みんな、それぞれ努力した成果があらわれていました。私たちの班も、ＢＧＭやナレーションの吹き込みなど、手間どった部分が多くありましたが、全員の努力でなんとか完成することができ、とても良かったと思います。音のレベルのずれなど少々聴きづらかった班もありましたが、全体的にみて良かったのではないでしょうか。(佐和田)

全体的に写真は良く撮れていたと思う。ナレーションは比較的ゆっくりと話されているものと、早口なものがあったが、少々ゆっくりと話しているものの方が見ている側としては良いように思った。バックの音楽も全体的に適切であったし、かなり練り直して編集されただろうなと思われるものもあり、これからスライドづくりをする際に、大変参考になるものが多かった。他のものと比較すると、我が班はもう少し練り直しても良かったなと思った。(遠藤)

1班　音楽と生の音が効果的に取り入れられていた。時間が長かったのを除けば、あとはよかったと思う。／3班　コマを切り換えるときの音が良かった。ナレーションをもう少しゆっくりしてもよかったのでは。／4班　1コマのナレーションが長かった。インタビューのバックがうるさかった。／5班　変化がなくて淡々としていたような気がする。ナレーションをもう少しゆっくりしたほうがよかったのでは。(池見)

今日見たスライドのなかで、自分たちのところを除いては、海人のスライドが良かったように思う。少し時間が長いかなとは思ったが、ＢＧＭの選曲やイカの釣り方などとてもわかりやすかった。自分たちのシーサーは、なかなか良いできであったように思えた。時間も適当で、シーサーの作り方などもよく理解できたのではないかと思う。全体的にどこもよくその特徴が表れていて、よかったと思う。(吉元真)

みんなあせったのか、ナレーションが速かったり雑音がうるさかったりしたのが残念だなあと思った。でもみんな内容や目のつけどころは、班ごとに個性がでていて良かったと思う。やっぱりみんな締切がさしせまってこないと動かないんだなあとつくづく思った。もう少し頑張って作ったらもっと良かったのになあ。(吉岡)

それぞれ目のつけどころが異なっていて、とてもおもしろかった。各スライドとも、その班の独自性がにじみでていたような気がする。スライドをみていると、その裏にみんなの苦労がうかがえる。普段何気なくみていた沖縄の物産をあらためて見直すきっかけになったのではないかと思う。(吉元美)

どの班もそれぞれ工夫を凝らしており、おもしろいものができ上がっていたと思う。二つのテーマについて、いろいろな角度から眺めていて、変化に富んだ内容のあるものだったと思う。スライドづくりはほとんどの人が初めてだったと思う（私もそう）ので、録音の仕方、ナレーションの読み方など、慣れていないせいか、もう少しかなという部分はあった。しかし、手抜きをしないで、少しでもいいものを作ろうという意気込みがどのスライドにも感じられた。(長山)

3　班

各班ともそれぞれの視点にたち、うまくまとめていたのではないかと思う。沖縄の知らない文化をわ

かりやすく学生の目で見、知ったものを説明していたので、わかりやすかったと思う。僕らの班の「三線」も、又吉さんのインタビューをもっとたくさん取り入れたらよかったと思った。1班の作品が映像・音響面でも素晴らしかったと思う。マスコミ関係に進みたいので、この授業は役に立ったと思う。
（上田）

全体的に見て、あまり良いと言える作品がないと思う。「海人」などはテーマがばくぜんとすぎており、何のためにこのシーンを使っているのかと思うものが何枚かあり、「シーサー」「豚」では、各種類の説明をするためにスライドを無駄に使っていると思った。「三線」「紅型」などは、音響が雑で、スライドとスライドの間がなく、とてもせっかちに仕上がっていた。／つくづく授業に手本として見せてもらった作品が素晴らしいものだったと感じた。（大城）

みんなのスライドを見ていると、本当に素晴らしくて感心しました。また、それと同時に、「あんなふうにすればよかったかな」とか「ここはちょっといまひとつだな」とか、今になって反省点が多々とみえてきました。何はともあれ、スライド作りはとてもいい経験になったし、沖縄の文化に接する機会を得られたので、それだけで大満足です。みんなおつかれさま。（山内）

全体をとおしてレベルの高い班が多かった。私たちの班は3班だが、音響が悪く、それが大変残念に思われた。内容としては濃くけっこういい線までいくかなあ、と思っていたからだ。やはり教室なら教室という現場で試してみないと、その出来具合というのはわからないものだと痛感した。（津波古）

総体的な感想として、これは自分の班の反省でもあるのだが、音響の効果が大きいということである。聞きとりにくい言葉というものは、わかりにくい以前に、人をいらつかせるものだということが認識できた。（黒木）

1班のは海人で、船の上での撮影など大変だったと思う。しかし苦労した成果はでていたと思う。2班については、シーサー製作者の人柄がよくでていたと思う。3班については、音が小さかったこととインタビューの内容がわかりにくかったのが気になった。しかし製造工程はわかりやすかったので、この点は評価したい。4班については、何もいうことはない。ナレーションがとちったりしたのも女の子らしくてかわいかった。5班のは紅型だったが、手順がわかりやすかったので良かった。（吉井）

どの班も素晴らしい作品に仕上がっていたと思う。効果音や題字・表などを始め、話の内容など、各班ごとにいろいろ工夫されていて、良かった。これは、みんなの努力の成果だと思う。特に、豚料理を取材していた班は、視点がユニークで、印象に残っている。（安里）

各班、きちんと取材を行っており、なおかつその取材を良く活かしたものばかりだったと思う。グラフや音響などの工夫も至る所で見られ、質的にも良い仕上がりである。ただ、作業音やインタビューなどの現場での音がこもっていたものが多かったのは残念である。しかし、これは機材的弱点も多いのでしかたのないことであろう。（安部）

4　班

全体的になかなかうまくできていたと思う。音響の面で苦労したところが多かったように思う。三線、シーサーなどは完成品しかみたことがないので、作成される過程が見れおもしろかった。（林）

各班ともそれぞれのテーマで、スライドをみれば、そのことについてちょっとした〝通〟になったのではないかという気持ちになるくらい、いろんな視点から見つめられていて良かったと思います。各班それぞれ苦労したんだろうなと思いました。私が一番良かったと思ったのは、シーサーの話でした。内容はどの班も負けずおとらずだったけど、スライドにした方がわかりやすくてよいなと思いました。（猪野）

表が見にくかったり、インタビューの声が聞こえなかったりしたのは、もったいなかった。それぞれの班で特色がでていたが、2班のシーサーが特に良かったと思う。／音響効果をもっと使うとか、ナレーションの声の大きさ、速さ、元気があるかないかなどで、聞こえ方がぐっと変わってくるのではないか

と思う。内容的には5班ともあまり変わらず、差がでたのはそういった小さな工夫からかもしれない。私たちの班の豚追跡物語もなかなか良かったのではないかと思う。(大山)

長い時間をかけてつくったスライドだが、インタビューのときあまり声が聞きとりにくかったり、小さなまちがいもいくつかあったので残念です。でも全体としてはうまくまとまっていたので良かったのではないかと思いました。他のグループの作品もいろいろ工夫を凝らしたものが多く、とても勉強になったと思います。(奥間)

試験の前でみんな忙しかったと思うけど、全体的によくできたと思います。／私たちの班の反省としては、もう少し編集に時間をかけたらもっと良いものができたのではと思いました。(崎山)

各班のスライドをみて、一つに対するつっこみがすごかったように思える。私たちの班の「豚追跡物語」はいろいろな場面が多すぎて、浅く広くなり、軽い感じになったように思えた。／みんな、効果音をうまく取り入れていた。(喜屋武)

どの班も、音楽を多用していて、ナレーションが聞きやすかった。／スライドの間の取り方は1班がよかったと思う。／自分の所属していた4班もそうであったが、スライド学習というのが目標であるから、もっとスライドを一枚一枚じっくりと見せた方がよかったと思う。(柿元)

全班とも、とても良く仕上がっていたと思います。朝早くの取材もあっただろうし、深夜おそくまで編集で学校に残ったり、それぞれの班の苦労やがんばりがスクリーンを通して感じられました。私自身一生懸命制作に取り組みましたので、できあがったときは涙がでそうなほど感激しました。スライドをみて、多くの人が私たちのテーマについて理解してくれたら嬉しいと思います。(伊集)

今回のスライド製作・発表を見て、全ての班に共通していることがある。それは、一生懸命取り組んだ姿勢がうかがえたことである。どの班も内容が充実していると感じた。(前上里)

5　班

教材として使っても恥ずかしくないような仕上がりだと「紅型」に思った。すごく素直でグループ学習の楽しさと遊びを入れたのが「シーサー」で、これも注意深くみることができた。豚料理の作り方へと脱線していった豚追跡物語も個性がでていて笑えた。(川崎)

作ったときは自分たちのものが良くできていると思っていたのだけれども、他の班のスライドも良くできていたと思う。自分たちは、沖縄の伝統工芸の紅型をやったのだが、自分たちの作品をあらためて見てみると、短いかなという気もした。しかし、今まで、沖縄で生まれ育ってきてはっきりしなかった紅型を知り、その製作過程を知ることができ、工房の人達とも知りあえたので、終わって何か得たという充実感で満ちている。取材したり、編集したりするときは苦労したが、発表会を終えてその苦労も報われたものと思う。(瀬底)

全てのグループとも時間をかけてつくった跡が見られ、内容もなかなか良かったと思う。気付いた点としては、豚料理を取材したグループがテーマをしぼりきれていない気がした。自分たちのグループの反省として、ナレーションがちょっと多かった気がした。スタートの音楽がよく聞き取れなかった点などあげられる。(佐久川)

昔つくったスライドを見て、私たちにこのようなスライドができるのだろうかと不安であったが、どの班もよくできていたと思う。私たちの班はナレーションが速かった。はじめてスライドづくりに取り組んだが、フィールドワークに時間がかかり大変であった。しかし、沖縄の文化に自分たちから取り組んでいき、大変勉強になった。(黒木)

他の班のスライドをみて、さまざまな工夫があるのに感心させられた。グループのメンバーが3つの学科にまたがっていて、日程の調整や取材の進め方に苦労したが、それ以上の手ごたえがあった。メンバー全員との友情も育ち、楽しい取材・発表ができた。(諸喜田)

三線、シーサーなど、なまえ・物などを知ってはいたが、それができあがるまでには人々のさまざま

な苦労があるということを改めて気付くことができました。このような沖縄の文化・伝統などに触れることによって、沖縄のすばらしさをつくづく思いました。(金城)

このスライドづくりを通して沖縄の地場産業をより身近に感じるようになったと思う。1グループの「海人」は作業工程とかいったものがないかわりに海人の声・仕事・ダイナミックさを知った。この授業を通して知らなかったこと・知らない人がわかるようになって良かったと思う。(古謝)

一つ一つのスライドを観て、沖縄のよさをいろいろな視点から見ることができた。また、わずか10分程度に編集されている作品にも、その裏には大変な苦労があることを知った。各班のスライドは、みんなすばらしかったと思う。特に1班のは、取材が大変だったことだろうと思った。(蔵本)

発表が無事終わって、〝やったーっ〟という感じだ。取材してそれを編集するのにかなりの時間と労力を費やしたので、仕上げた充実感というのか、何か嬉しさのようなものが込み上げてきた。他の班の発表も大変良かった。音楽が効果的に使われていたり、いろんな角度から取材してあったりと、大変ためになった。(上村)

スライドのできは、みんなそれぞれユニークで素晴らしかったと思います。さまざまな資料を駆使して、自分たちの脚で歩いていろんな人から話を聞いてと、実際に自分たちのものになっているんだなと感心しました。スライド(写真)も音響効果なども工夫されていてすごく良かったと思います。それぞれのグループの個性が反映されていて、すごくおもしろかった。(上間)

資料2
Aレポート(4班)

今にしてみれば、出きあがってしまったので、楽しかったことおもしろかったことの方が多かったように感じたのですがこの10分、30枚の「豚追跡物語」の中には10人の知恵で一生懸命できるかぎりの努力を成してきたことを忘れない。

① はじめに

<11月20日>

今日から自分達の手でスライド作りをすることになった。その作品にとりかかる前に今までに先輩方の制作されたスライドを見た。内容的に私の興味を引くものが多かった。(沖縄そばについてとか、山城まんじゅうについてだとか、食べものでなくても壺屋焼きなど)私が長崎の出身のため沖縄のことをよく知らなかったというせいもあるだろうが、とにかく見入ってしまった。その時、すごいな、やってみたらおもしろいかななどと結構希望をもちつつも、私達にこんなすごいものができるのかな、すごいものでなくても、形だけでもきちんとできるのだろうかと思い、不安がよぎったのを覚えている。テーマが沖縄のことでということだったので、少しおもしろいかもと思ったりもした。スライド作りに取り組むにあたって先輩方の作品を見たことによって複雑な気持になったということである。

この後、先生からの提案により、班分けがなされた。様々な学部、学科の人達がよせられ〝4班〟として10名の班ができた。私は班分けのプリントを渡されて何度も見直してみた。この時、同じ学科の子がいなくてとても不安だったのを覚えている。形はどうあれ、皆どこかに不安があったようだった。

<11月29日>

ビデオ「いい旅日本(沖縄編)」を見て沖縄に関する知識を少し深めた後で、自分達の取り組むテーマを出し合うことになった。ビデオで見たのは、まだまだうわべだけしか沖縄を見てないなっと思った。(まだ沖縄に来て1年半ほどしかたっていないが。)えらそうだが本当そう思った。

この後、4班の皆んなで顔会せ。やはりはじめ自己紹介の時、皆んなあまり言葉をかわすこともなかったので、できるのだろうかという不安がつのってきた。だがこの班で1つのスライド制作をするという

課題を目的として駆け出したのである。思うより産むが安しだと思ったのもこの時だったと思う。

② 企 画

スライドは30枚、10分程度のものを作るぞということで、始めはどのような内容のことをやろうかというテーマを決定しなければならなかった。内容の柱として〝沖縄に関連したこと〟ということであった。そこで、今までのスライドのテーマで取りあげられていないもので、自分達の興味をもてるもの、自分たちで取材などもやるということもあったので、できそうなものなどということを考えて、沖縄のことをランダムにあげていった。この時、本土の学生と地元の学生がいたので、見方の違い（沖縄ではあたりまえだと思っていても、本土の人にしてみれば、おもしろいと思ったりすることなどが結構あると思う。）などからテーマを出すとおもしろいものができるようである。私達の班のテーマはこれが決定のきっかけとなったと思う。あげられたものに、（取材の時、食べ物の方がよいのではということで）ちんすこうや豚料理がでてその他には、琉球漆器や琉球ガラス、紅型、シーサー、などなどたくさんのものがだされた。この時には、班の皆んなが、いろいろ言えるような雰囲気になっていたので、私の中の最初の不安は、消えていた。たくさん出された中から３つが選び出された。その時は、他の班が取りあげないようなのがよいといって、ちんすこう、豚料理、琉球漆器を選んだ。この時間はここまでで、次回に最終決定をしようということになっていた。だがこの時、もうすでに皆んなの意見は、〝豚料理〟に傾むいていたような気がする。

＜12月６日＞

テーマ最終決定の日である。沖縄の地元の子の豚料理の話をいろいろ聞いて、食べられないのは鳴き声だけというように、私などが「えー、そんな所まで食べるの」と驚いたりしたのが決め手となったようで、わりとすんなりテーマは〝豚料理〟をスライドにしようと決まったのである。この時、豚料理に関する事がらの書かれている本を持ってきてくれた人がいたので、本も参考にしながら私達の内容は深まっていた。自分達の知識だけでなく、たくさんの資料をもとに豚に関していろんな関連づけをした。この過程は結果的によい作品を作るもととなったようである。この時間に決まったことは次の通りである。

1. テーマ　沖縄の豚料理
2. ねらい　沖縄の食文化を知る
3. テーマのもとで取り上げる内容（事柄）
   - ○ 豚一頭でできる料理
   - ○ 長寿との関係
   - ○ 家庭一般料理と加工品（沖ハム）
   - ○ 豚の歴史
4. 取材先
   - ○ 沖ハム
   - ○ 公設市場
   - ○ 養豚場

あとは、何か参考になるようなことがあれば各自で調べてこようと約束してこの時間は別れた。ここまでが企画の段階である。ほんの駆け出しということであろう。

③ 撮影台本の作成

＜12月13日＞

どのような手順でスライドを組みたてて行くかということを決めなければならない段階である。そこでコンテの作成に取りかかった。始めは内容をおおまかに流すことから始めた。図式すると歴史→養豚→市場→料理→加工品についてということにした。図にしてみれば簡単なことのように思えるが、この流れを作るのにもいろいろと苦労した。豚料理をやると決めてから、いろんな面に目を向けようという

ことで、文化や歴史さらには加工品までとたくさんでてくるのはよいが、どのように結びつけるのが効果的かとか、実際に取材に行く所があるのかといろいろな所に小さな問題がでてくる。自分たちのもっている意識とアイデアを交換することによって流れも、どうにかできあがった。歴史として、昔の豚の飼育場所（いわゆるフール）についてのことをもってくる。このことによって昔から豚が沖縄の家庭、沖縄の生活と結びついていることをのべるためである。そして本からの知識により、豚料理が長寿と関連していることを知ったので、そのことに触れることになった。講義を受けている先生にそのような栄養学のことの専門の先生がいらっしゃると提案されたので、その先生のお話を是非取り入れようとなった。次に豚に実際ふれようということで養豚場を取材することになった。次は人々の口に入るには、肉屋で肉を買わないといけないということになった。いろんな部分を売ってあり、市民の台所のような所ということで、公設市場を取材することになった。次に今回のメインイベントとも言える〝料理〟を何種類か、それもめずらしいものを入れようとなった。最後に現代に多く摂取されている加工品、豚も例外でないということで沖ハムを取材しようということになった。こうやってたどってみると、すばらしい流れだなと感心してしまうのは、私ばかりではないと思います。この時間の最終結果は次のとおりである。

コンテ作成（1）

タイトル
豚の写真
歴　　史　・豚の歴史　　・先生の話　　・おじー おばー
養豚場の写真
おじさんの話
フール
ブタがトラックに乗っている姿
市場の写真
おばさんの話
豚の各部分の写真
料理を作る過程 ―― 豚足（てびち）の煮こみ／中身／耳皮／豚脳のてんぷら
できあがり写真
他の代表的な料理
まとめ

次の時間までに取材する時の質問事項を考えてこようと約束してこの時間に別れた。この時は自分達の意見をすべて収めた。実際の時間とか、その他のことを考慮に入れていないコンテだった。

＜12月20日＞

1990年最後の皆んなで、顔を合わせる時間だった。取材しなければならないということで、かなり綿密なコンテを作りあげなければならなかった。この時、前の時間取材しようとしていた沖ハムは豚の形を残していないし、スライドにするにも多すぎるし、などという理由でカットした。他のものも実際絵を書きながら話をすすめていくと、かなり無理なものなどとか出てきて修正しながら取材のできるような段階までもって行かなければ、とがんばった。

大学生、暇なようでけっこう忙しく、暮れということもあり、取材は年明けということになり、1月12日（土）ときめた。取材先は養豚場と市場。それに料理の取材もこの日に。だが、先生へのインタビューは先生の都合もあるということで他の日にすることにした。かなり自分達の勝手な予想が含まれてはいたが、なんとか取材のイメージもついたということで、この時間はここまで。また来年がんばろうということで終った1990年のスライド作りであった。

④　撮　影

＜1月10日＞

年も明けた1月10日、取材を2日後にひかえて、取材先での質問を考えたり、カメラやテープレコーダーの手配をしたりした。ここで一つハプニング、養豚場に取材に行こうとしていた。どこの養豚場に行くか決めていなくて、電話をタウンページで見ながらしたのだが、時間がちょうどお昼ということもあったのだろうか、通じなくて場所は決まらずじまいだったのである。

＜1月12日＞

1月12日（土）AM7：00に学校の近くに集合した。天気は雨が少し降っていた。この時もまだ養豚場に連絡がとれていなかった。どこの養豚場へ取材へ行けばよいのか……。始めは近い方がよいと思っていたが、こうなると少しぐらい遠くてもよいということになって朝早いから迷惑かもしれないが、背に腹は変えられないような気持で電話をした。私が受話器をもっていたので、一番ドキドキした。出てもらえなかったらどうしよう。1件目何度コールしてもダメ。2件目電話が不通となっている。どうしよう、どうしようと思って3件目、つながった。ヤッターという気持とダメといわれたらどうしようという気持で話を進めると、取材してもよいとおゆるしが出た上に、今からすぐにでもどうぞといわれてとても感激してしまった。せっぱつまっていたものがスーと落ちていくようで、少しホッとしてしまった。予定より1時間ほど遅れはしたが、今回取材した西原町にある南国生産養豚組合へ取材しに向かった。このころには雨もやんでいて、さあがんばろうと思っていた所にもうひとハプニング。車2台で行ったのだが、養豚場がとてもわかりにくい所にあり、まよってしまった。これまた、目的地に到着するのに手まどってしまった。やっとの思いで到着して、取材をはじめた。取材はといいますと……。ここで働いている方がみな親切だったのでスムーズに行った。豚はおりの外から見ることはできたし、（病気もちの豚、はいえんなどがあるのであまり近くには行けなかった。）豚のえさもいろんな種類のものを見せていただいた。おじさんにお話を聞かせていただいたのですが、お仕事中であったにもかかわらず、丁寧に答えてもらいました。とてもありがたかったと思う。ここで困ったことといえば、臭いがとてもくさかったということが1つあった。髪に豚の臭いがしみついたのではないかというくらいで、この後にも他の取材をしなければならなかったので少し心配した。思っていたより、臭さはなかったようだが……。もう一つ心配したことは、おじさんのお話を聞く時に、場所が作業場の近くだったので、機械の音がずっと鳴ってたので、録音されているか心配だった。おじさん方にお礼を言って外に出てから聞くとなんとか入っていたのでよかったということで、養豚場をバックに記念撮影を行って、ここでの取材は無事終了した。次の目的地は市民の台所、那覇の牧志公設市場だった。皆んなで列を作って歩くようにして入っていくとまず魚売り場が目をみはるような大量の山で売ってあり、驚いた。私はここに来るのが始めてで興味深く見て回った。奥に私達の目的とする肉売り場があった。これまたせまってくるようなすごさに驚いてしまった。自分の回りぐるりとかこまれてしまうほどのすごい量だった。肉屋だから牛肉売り場もあり、観光客と思われる人達がたくさん買っている光景もあった。でも私達が目的とするのは豚肉／ちょうど行った時間がよかったようで豚がまっ2つに切ったままのやつとかがデーンとおいてあり、インパクトが強く、これを是非スライドの1枚へということで写真をとった。じっくりみればみるほどびっくりの連続で、見たことのない顔の皮（これ本当豚ってわかるのできもち悪かった。）耳、しっぽなど内臓関係ももちろんのことのように、豚のすべてが売られていた。豚の顔を5枚ほど買っていかれていたおばあちゃんに「おいしいの？」と聞くと「こりこりしておいしいよ」といって料理の仕方まで話してもらった。売っているおばさんに話を聞くと、豚肉を買って行くのは沖縄の人が多くて、その中でも足てびちが一番売れるとおっしゃっていた。栄養がよいということもいわれていた。このおばさんはお客さんに、料理しやすいようにさばいて渡していらっしゃった。その腕もはく手並だった。私達も自分たちで料理を作るということで、足てびち5本と耳皮（ほそく切ったもの）1袋を買った。それでも800円と安さにも驚いてしまった。この市場はやはりすごいようで、TVの取材もきているほどだった。この興奮のさめないまま、2階が食堂になっていたので、豚料理を食べに行くことにした。

なるべく別々の豚料理を注文して皆んなで交換して食べた。私は普段、豚料理そのものをあまり食べないということで、比較的普通ぽい、三枚肉の煮つけにした。その他皆んなからもらって足てびちや子袋（子宮）かん臓なども食べたが、私はやはり異質のもののようで、お中はすいていたはずなのにあまり食べきれなかった。沖縄の人はこれを食べるから長寿なのかとしみじみ思ってしまった。この後は班員の伊集さんちで料理を実際作ってみた。メニューは足てびちの煮込みと耳皮刺身のあえものである。下ごしらえを皆んなで手分けしてやった。てびちは煮込むのに4時間ほどもかかった。この間はみんなでわいわいやっていたので楽しかった。耳皮刺身の方は、耳皮をゆでるだけで、あとはあえるだけだったのですぐ出きあがった。お味の方はというと、やはり私はてびちはあまり食べきれなかった。だが耳皮刺身の方は、こりこりして好きだなと感じた。（耳だと考えなければ）

今日の取材はここまでだった。この日、いろんな体験をしてドキドキ、ワクワクしながら楽しんだのは、私だけだったろうか。

＜1月31日＞

話が前後するのだが、1月31日（木）ＰＭ５：00〜保健学科の松崎俊久教授に豚料理と長寿の関係についてインタビューしたので、取材の項目に入れる。この取材は、松崎教授が出張していらっしゃたりして時間の都合が合わず、スライド発表間際のインタビューとなった。だが、くわしく丁寧にお話しして下さった。このインタビューはコンテ段階からやろうということだったので、スライドの順番のワクをあけておいた。だが、先生の話をよりわかりやすく紹介するために表を作成することにした。

＜2月1日＞（金）

教授の話で具体的に必要とした豚肉、鶏肉、牛肉に含まれるコレステロール値の比較、平均寿命ベスト５（国民衛生の動向Ｓ60より）表を作成した。この方がわかりやすいとあせりはあったがみな納得した。

ゲートボールをしている老人（おばー）がいらした所に行って写真をとった。この時話しかけてみると本当に元気だった。本当発表間近であったがよしとするものがとれてよかったと思った。

つけ加えとして、フールの写真は伊集さんがアイランドパークへとりに行ってくれた。タイトルとか制作者の文字は私が書いたのだが、汚くてゆがんでしまって恥しい……。だがなにはともあれ、これで撮影はすべて終了した。

⑤　編　集

＜1月24日＞

写真は、多めに取っていたので、その中から選ばなければならなかった。スライドになって、初めて写真をみるのであったから、皆んなワクワクしながらやった。この時、人に見せるという点で注意したと思う。私達はある程度豚のことをやってきたので、これらの写真を見ればわかるのはあたりまえである。でもスライドを作って皆んなに見てもらうからといって、こっちの方がいいんじゃないかと選びながらやっていたと思う。この時間選びだすのがせいいっぱいだった。

＜1月31日＞

発表会を1週間後にひかえてラストスパートといいたい所だが、この日まだ選びだしたものをきちんと並べて、これでいいかって皆んなでいい合ってまとめた後、ナレーションを考えはじめたばかりでまだ録音するには不十分だった。そこで皆んなの発表までのスケジュールを出しあって集まってやることにした。

＜2月3日＞

2月3日（日）ＰＭ５：00から柿元くんのうちでシナリオ作成をやった。ナレーションもBGMを完璧にした状態で録音にもっていかないと時間がないということで気合を入れてやった。この時、松崎教授の写真、表の写真ができてきた。入れてみると順番を変えたり、省いてもよさそうなものがでてきた

ので、入れかえからやった。この時もいろいろ意見を出し合った。

私は初め会った時より、皆んながいろんなことをいいあえる雰囲気が好きだった。ＢＧＭも悩んだ。沖縄の伝統的文化などであれば、沖縄民謡をたくさん作ってもぴったりくるだろうが〝豚〟ではね、ということだったからである。クラシック・ポップスいろんなジャンルから考えてやっとの思いで選びだした。ナレーションも自分たちのつたえたいことを入れると長くなってしまう。とくに始めの方の歴史についてがそうである。まよいにまよったが、少し長くてもということで取り入れた。ナレーション完成、ＢＧＭ決定、あとは録音を残すのみとなった。

＜２月５日＞

２月５日ＰＭ３：00より教育実践センターでやった。センターに行って録音したいと頼むと、録音器具のたくさんおいてある部屋へ案内して下さった。だがどうやって扱っていいのかわからなくてとまどっていると中教技術の男の方々が、録音できるまでに準備して下さった。

テープの音楽も聞いてＯＫ。ナレーションはじゃんけんで負けてしまって私がやることになった。練習してだいじょうぶのようだ、ということで始めて、やり直しなども何度かあったが、それでは少しきいてみようということで再生すると録音されていないというハプニング。私達の操作ミスかと思ってもう一度いわれた通りやってみる。だけど録音できない。教育実践センターは５：00閉館ということだったので、あせりまくった。そこで失礼かとは思ったがもう一度たずねた。そしたらわざわざ来て下さって機械を見て下さって録音のテストまでやってみて下さった。原因は線のつなぎまちがいだった。時間はせまっているので気をとり直してかかった。あせる気持もあるし、緊張してしまって私がとちってしまう。仕方なく少しのとちりはそのまま進めることにしてがんばったが、５：00ＰＭには終わりそうになく、どうしようと困っていると、手伝って下さった１人の方が責任者として残って下さって、５：30ＰＭに終了した。できたという喜びで〝ＯＫ〟といってしまって、マイクをさげたつもりだったのだがそのまま録音されてしまったようだ。この時、本当はうれしかった。飛びはねて喜んだのも事実である。あとは後かたづけとかもしなければならなかったので、できあがったものを聞き返す余裕はなかった。伊集さんがテープをもって帰り聞いてくるといってくれたが、もしこれはダメだと思っても取り直す時間がなかった。本番うまくいってくれることを願うしかなかった。

⑥　発表会

＜２月７日＞

11月から取りかかって、皆んなで取材しまとめたスライドが皆んなの前に出る時がやってきた。私達の班は４班だったので前に３つの班の発表があった。どの班もいろんな所に工夫を入れてそれぞれいいなと思えるものばかりであった。それとスライドとテープを合わせてきくのはこの時がはじめてだったので、本当にドキドキして緊張した。見てる時もナレーションがとちったり、いらない声が録音されてたりで私は顔を上げるのが恥しかった。終った時、拍手と回りから聞こえてくる「おもしろかったね」「よかったね」「おつかれ様」などいろんな声がきこえてきた時、やってよかったと本当に感じた。皆んなもそう思ったと思う。４班10人全員で作り上げた、いや、いろんな所でいろんな人に助けてもらい協力してもらったし、発表会でじっと見てくれた人達がいるので10人じゃないですね。〝豚追跡物語〟に関わった皆んなで作り上げたこのスライドすごくいい出来だったと思う。実際、回りの評価もよくてうれしさ倍増である。

⑦　スライド制作を終えて＜後輩へのアドバイス＞

スライド作り、機会あればたくさんの人がやった方がよいと思う。最初はめんどくさいような気がするかもしれないけど、得るものは大きい。

仲間とやるというのも１つ得たものだと思う。初めは全く知らない人だったのに今では気軽に声のかけられる仲間となる。とてもすばらしいことだと思う。豚追跡物語を制作したおかげで豚に関して〝通〟

になったような気がします。このスライド作りを終えて、私は1つのことをやり遂げた満足を得ました。なによりもうれしかったことです。

後輩の皆さんへのアドバイスするような、すばらしいことをしたわけではないので私の反省をあげますので参考になればと思います。

- 録音する時（特に取材先で）回りがなるべく静かだとよかったと思う。養豚場も市場もいろんな雑音でせっかくのインタビューが聞きとりにくかった。
- 録音する時間が短かったため、雑なものとなってしまった。
- 取材先には確実に連絡できなかったため、取材当日にあわててしまった。ひまな時間などもおききして行けば、インタビューもゆっくりきけて、雑音のない所でやれたかもしれない。
- テープを忘れたりして、録音したものの上にインタビューなど入れてしまったので聞きとりにくかった。

本当に皆さんおつかれ様でした。大きな喜びを得ることができ私は少し成長したなと感じるのは、私のうぬぼれでしょうか。このような機会を与えていただき、どうもありがとうございました。

Bレポート（4班）

中等教育原理Ⅱの授業の中でスライドを制作すると知って、恐怖のグループ発表が11月22日、木曜日ついにやって来た。同じ学科の友達も知り合いもいないこのクラスで見たことも、会ったこともない人々と一緒に、はたしてスライド等作れるのだろうか、と不安いっぱいの日である。我々の班は10名。初顔合わせにやはり交わす言葉も少ない。不安である。

29日、ビデオ「いい旅日本（沖縄編）」の映写を見て、優れている点•工夫したらよい点を班で話し合う。名前もまだ憶えられず、お互い遠慮がちでなかなか意見が出ない。いささか苛立たしい。次に各班でテーマを模索、さすがに単位獲得のためかどうかはしらないが私も含め、みんなの目の色が変わる。やるからには、楽しく、おもしろく、かつ内容の濃い作品にしたいので、それぞれが真剣にテーマを考え始める。その結果、しぼりにしぼり出されたテーマが3つ。•1）琉球漆器について•2）沖縄の代表菓子のちんすこう•3）豚について。いくつかのテーマが出されて班ごとに発表。そこでやはり重なったテーマも見られる。

12月6日、スライド制作過程の説明を受け、その後いよいよテーマ決定。本土の人が半数を占めていて、彼らは沖縄の人が豚の内臓や足を食べるのが不思議でたまらないと、ウチナーンチュ（沖縄人）である私に「何故？」と質問してきた。「何故？」と尋ねられても物心ついた時から食べていたのだから理由などない。答えに困った私は、「よし！それじゃあ、その謎を解きあかすために、テーマは〝豚〟だぁ！」とかくして我々の豚追跡物語が始まる。そしてテーマ用紙を制作。その場に持ちあわせていた参考図書「誰も書かなかった沖縄－関広延」、「長寿県ウチナー－琉球新報社」、「南の島の栄養学－尚弘子」、「沖縄の誘惑－文藝春秋編」を参考にして、興味のある点を選び出し、内容、ねらいを考慮。その時に上げられた内容事項とは、豚一頭でできる料理、長寿との関係、家庭一般料理と加工品、豚の歴史である。ねらいは「沖縄の食文化を知る」に決定した。取材先は沖縄ハム工場、牧志公設市場、養豚場を予定。

12月13日、流れの構成、撮影指示、解説文を考える。先にも書いた参考図書を利用し、みんなで手分けして解説文を書き上げる。まず、沖縄の食文化、豚数、歴史、豚のえさ、琉球料理、長寿について調べ上げる。授業も2、3回過ぎる頃から、初めのような緊張感や不安感、遠慮や苛立ちも薄れ、全員が協力的、意欲的な態度へ変わりつつある。

12月20日、コンテ作成2日目。前の授業中に調べ上げた事柄に添って、1コマ1コマに解説文をつけ

ていく。インタビューの予定も計画しているので、コマに説明がつかないところもある。自分達で実際に料理しようという画期的な案も取り入れ、料理は豚の内臓を材料にする「中味汁」と耳を使う「耳皮刺身」に決定。なんとなくワクワク気分である。一通り大まかにまとめてコンテを提出。フィルムやテープを受けとって、撮影日時を決めようとすると、なかなか全員が集まれる日がなく、来年にもち越すことになる。大学入試の１月12日、土曜日の朝７時に北口にあるスーパーで集合することで話は落ちついた。

１月12日、寒い朝である。家を６時半に出ないといけないので５時半起床という過酷な試練に耐えた朝である。いざ集まってみるとどこの養豚場へ取材に行くのかはっきり決まっていないことに気づき、大慌てで、あちらこちらの養豚場に電話をかけまくるが、さすがに早朝７時ともなると電話がつながらない。「豚も寝てるのかなぁ」と一人バカげたことを考えながらも、最後の頼みと、西原町にある養豚組合にかけると、親切なおじさんが、「いらっしゃい」と言ってくれて、道順も教えてくれた。養豚場は広く大きな規模である。豚の臭さには、苦しめられたが、初めての取材を経験することで、胸の内は踊っていた。そこで、子豚・大豚やえさ、育てるときに注意していること等を代表者にインタビューして、その声を録音。写真も三種類のえさや豚や働く人々の姿といろいろなアングルで撮る。帰りには、養豚場の前で記念撮影。

次の取材地は牧志公設市場。ここで、さばかれた豚肉を撮影。噂通り、豚肉の量はすさまじいもので圧倒される。タイミングよく、豚の体をさばいているお兄さんがいたので、「一日どのくらいさばくのですか」と質問すると、「２頭」という答えがかえってきた。顔の皮や肺、耳など珍しいものが並べられていて、思わず取材していることも忘れて豚肉に見いっていた。お昼頃になり、二階の食堂で食べることになった。メニューを見てびっくり。50種以上ものメニューが壁いっぱいに張り付けられている。その中には聞いたこともないメニューもある。そこで、せっかくだから珍しい豚料理を注文して、写真を撮ってしまおうという取材根性を発揮。豚の子袋（子宮）炒め、豚足の煮込み、三枚肉炒め、すべて豚肉料理。写真撮影の後、みんなで試食。本土の人にとっては、やはり抵抗を感じるのだろう。彼らはまるで生きた蛙を食べようとしているかのような顔つきをしていた。

腹ごしらえも終わると次の目的地へ行く前に市場でちょっとした買い物。豚足５本、耳皮１袋、きゅうりに大根、こん布。そう、次の目的地とは、私の家であり、ついに自分達で料理をするという計画実行の時がやって来たのだ。当初の予定では、中味汁を作るはずであったが、栄養度が高い豚足に急きょ変更。私の家へつくとすぐに作業が始められる。豚足のあく抜きをしたり、耳皮をゆでたり、きゅうりや大根を切ったり、みんなで養豚場や市場でのことを思い出しておしゃべりしながら楽しく料理することができた。過程で写真を数枚撮り、作り方は細かくメモしておく。出来上がりはなかなか良く、とてもおいしかった。豚足を煮込むのに４時間ほどかかり、外はうっすらと暮れかかっていた。

１月31日、保健学科の松崎俊久教授に豚料理と長寿の関係についてインタビュー。松崎教授は非常にお忙しい方で、我々と時間の都合が合わず、スライド〆切り間際のインタビューとなった。声をテープレコーダーに録音し、インタビュー後に写真撮影。その後、松崎教授のインタビューに加えて、より豚肉と長寿の関係を具体的にするために、表を作成。それらの表とは、ａ）豚肉・鶏肉・牛肉に含まれるコレステロール値の比較、ｂ）豚肉購入量の比較、ｃ）平均寿命のベスト５、である。

２月１日、ゲートボールをしている老人を撮影。沖縄の人が、豚肉を他の県人よりも多く食べ、非常に健康であり、長生きするということを強調するためである。

２月３日、編集に入る。柿元君のアパートでシナリオ作成。スライドの順番決定で非常にもめる。ナレーションは、前に１度作成したコンテや、新たに資料から調べ出した事柄をつけ加えて、内容をふくらませていく。問題はもう一つあった。ＢＧＭである。みんなで持ちよったテープから、豚のイメージに合う曲や、料理の場面で流す曲、タイトルのバックに流す曲をさがし出すのも一苦労。議論の末、４曲が選び出された。そして今までのインタビューの声も、どの部分を使うかよく考えて選び出された。

この日でいつ録音に入ってもいいように準備しておく。

2月5日、ついに仕上げの録音日である。各自講義を終え、3時に教育実践センターに集合。運よく、そこには技術科の方がいらっしゃって、機材の使用説明、準備をしてくれた。録音には1台のラジカセと1台の録音機のようなものを使用。ナレーションは猪野さんである。5時までしか使用できないとのことで、残りわずか1時間半。神経集中して、気合いを入れてやろうと始めの頃とはうってかわっての団結力を発揮。途中、ナレーションミスや音響ミスがあり、30分オーバーしたものの、2時間という短時間で録音終了。みんなの顔から喜びの笑みがこぼれる。

2月7日、発表の日がやって来た。徹夜して全く寝てないという班もある。今までの苦労や努力が報れる日である。他の班の出来もなかなか良く、また感動させられる場面さえある。少しづつ少しづつ自分の班がせまってくるとやはり緊張と不安はかくせない。ついに、これまでの成果を発表する瞬間がやってきた。音声が聞き取りにくい所や、ナレーションにミスがあったりしたものの、素晴しい出来である。涙があふれ出すのを必死にこらえた瞬間であった。

スライド制作を終えて、こういう貴重な体験が出来たことを心から感謝している。いろいろ取材をしていくうちに、いろいろな知識を得ることができた。制作も知らない人同志が協力し合ってスムーズに進み、1つの大事業をやってのけた喜びは、一生忘れない。朝早くの取材や夜遅くまでの編集もあって、勉強と両立させるのも大変だったけど、でも今ふり返ってみると、やって良かったと思う。後輩へのアドバイスとしては、まず行動は早めにおこすこと。取材活動を早めに開始しないと、編集段階で時間がかかるので、後であわててしまう。そして、写真の取り直しや、つれ加えをする時も早めにやらないと編集が進まない。そして一番大切なことは、はじめにみんなで力を合わせてやる事。必ず素晴しい作品が仕上がるし、自分自身、自信もつくし満足感や充実感がえられる。大学生活のいや、一生の思い出としていつまでもいつまでも忘れることなく、心の中に残るものになるだろう。